

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12949

研究課題名（和文）シンガポール・マラヤにおける「五四」文学青年の総合的検討

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of May Fourth Literary Youth in Singapore and Malaya

研究代表者

松村 志乃（MATSUMURA, Shino）

近畿大学・国際学部・准教授

研究者番号：40812756

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は20世紀初頭に旧英領マラヤに育った華人若手文学者たちの文学と思想を総合的に考察するものである。研究成果としては以下の3点が挙げられる。まず、英領マラヤで活躍した作家のひとりである王嘯平の文学の検討を通して、中国の「五四」文学に影響を受けたマラヤの青年作家の思想とその後の足跡を考察した。またコロナ禍で数年にわたり現地に訪問できずにいたが、最終年度には現地に渡航し、研究者と現在につながる交流を行い、貴重な資料を収集した。さらに本研究を通して、中国語圏文学という新しいプラットフォームにおける馬華文学の位置づけのみならず、中華人民共和国の文学の位置づけを再検討することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀半ば以降中国語圏はイデオロギーに二分され、文学研究もその影響を受けてきた。だが今日、国民国家の枠組みを超えた「中国語圏文学」の研究が世界的に行われている。中国という中心に対し、辺縁に置かれてきた華人文学の意義に目を向けることは、華人文学の再認識に有益であるのみならず、言論統制の厳しさを増す中国を含めた中国語圏文学研究、ひいては中華圏の文化、社会に対する認識をより豊かなものにする可能性をもっている。本研究は馬華文学の起源を20世紀初頭とし、現行の議論の中で馬華文学が生成される過程を検討した。まだ研究半ばではあるが、世界的な中国語圏の社会に関する研究の潮流に資するものとなったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study comprehensively examines the literature and thought of young Chinese literary writers who grew up in the British Malaya in the early 20th century. The following three points can be noted as the results of the research. First, through an examination of the literature of Wang Xiaoping, one of the writers active in British Malaya, this study examines the ideas and later footsteps of young Malayan writers who were influenced by the May Fourth literature in China. In addition, after several years of not being able to visit this area due to the Corona disaster, I visited there in the final year of the project to interact with researchers and collect valuable materials. Furthermore, through this study, I was able to reexamine not only the position of Mahua literature in the new platform of Chinese literature, but also the position of literature in the People's Republic of China.

研究分野：現代中国語圏文学

キーワード：中国語圏文学 華文文学 馬華文学 王嘯平

## 1. 研究開始当初の背景

旧来「現代中国文学」分野では、中華民国期(中国大陸)の文学、中華人民共和国の文学、あるいは台湾の文学というように、国民国家の枠組みの中で各時代各地域の文学活動を考察してきた。だが近年、近代国民国家の言語で構築された文学の枠組みが疑問視され、母国語以外で書かれた文学が多様な世界観を構築するものとして着目されるようになった。中国現代文学の分野でも、王徳威ら米国研究者を中心に、中国大陸のみならず、台湾や東南アジア、米国等の地域に暮らす文学者の華語および中国語による文学を相対的にとらえる「サイノフォン文学(Sinophone literature)」が新たなプラットフォームとして注目を集めるようになった。

そのような中、本研究は近年新たに研究が進んだ分野のひとつである「馬華文学」に着目した。馬華文学とは、旧英領マラヤ(現シンガポール、マレーシア)で書かれた華語文学を指す。馬華文学の興起は、馬華文学の若手文学者が台湾で文学的成就を果たしたことや、現地で良質な馬華文学を扱う小規模書店が注目を集めたこと、研究機関における研究が充実した研究が行われたことが背景にある。こうした動きは主に、第二次世界大戦後にマレーシア、シンガポールで生まれた文学者によるものであり、同地で華文文学を振興させようとする彼らの問題意識を如実に反映してきた。

その一方で、第二次世界大戦前やその直後に書かれた最初期に英領マラヤで書かれた馬華文学は、今では存在しない国家の文学であることも関係して、現在ではあまり検討されてはいない。しかし中国大陸の「五四」文学の影響を受けて生まれた黎明期の馬華文学は、華人ナショナリズムの興起や日本の占領、シンガポール人意識の興起などの歴史と密接な関係があり、今なお検討の余地がある。

他方、日本では当時のマラヤ在住日本人について研究が行われているほか、中国文学の分野でも、一時マラヤに在住した後日本軍に殺害された中国の文学者郁達夫について、かなり詳細な研究が行われている。こうした日・中の文学的視点を横断的に視野に入れつつ、最初期の馬華文学者の人生とテキストを総合的に検証すれば、中国との距離を意識しつつも、そこに足場を置くことなく、ときに国民国家の枠組みを跨いで確立したアイデンティティのあり方がより多角的に浮かび上がる可能性があると考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究は、1920 40年代のシンガポール・マラヤにおいて、中国の「五四」文学に影響を受けて若手文学者として活躍した文学者たちの作家論を、当時の日本や中国の文学を視野に入れながら構築し、その文学と思想を総合的に考察することを目的とした。言い換えると、黎明期の馬華文学の担い手である作家たちが、中国の「五四」文学をいかに受容しながら文学者群を形成したのか、また、その後第二次世界大戦および日本の占領下をいかに生き、晩年にはいかなるアイデンティティを形成したかを検討したものである。

具体的には以下の二点について、検討することを目的とした。①1920年代後半から40年代の英領マラヤにおいて、中国の「五四」文学に影響を受けた青年作家がいかなる文学活動を繰り広げたかを検討する。②戦後様々な地で生きたシンガポールの「五四」文学青年の戦後の足跡を追い、彼らがいかに国民国家の枠組みを受容、逸脱しながらアイデンティティを確立したかを再考する。こうした研究成果を通し、中国語圏文学という新たなプラットフォームの中で馬華文学ひいては中華人民共和国の文学が現在どのように位置づけられるかを検討する。

## 3. 研究の方法

当時マラヤの若手作家であった方北方、王嘯平などの作家のテキストを収集、通読する。さらに方修編『馬華文学大系』(1967、香港)所収の散文、小説、戯劇編も通読し、無名の文学者を含めた形で、当時の文学的背景を押さえた。また現地に赴き、マレーシア、シンガポールにおける華人の生活状況、文化状況を肌感覚として理解する。同時に、マレーシアの Southern University College にある馬華文学館を訪れ資料を収集し、現地の研究者と交流を図る。

上記の基礎研究を通して、主に1920年代から40年代のシンガポール・マラヤの「五四」文学青年が、文学を通していかなる応答関係を築いていたか、またどのような社会活動を展開していたかを総合的に検討する。さらに、抗日街頭劇など華人文学者の参与した社会活動や日本占領期の画像や資料なども可能な限り目を通す。さらに米国で進められている「サイノフォン文学」研究動向に着目し続け、最終的にかかる議論と、研究の結果明らかになった馬華文学創成期の多様性に満ちた文学活動とが、その議論においていかに位置づけられるかを検討する。

#### 4. 研究成果

(1) 英領マラヤ出身作家による文学の解説、および当該作家の第二次世界大戦後の足跡についての検討：

1. 口頭発表「人民中国に生きたマラヤ文学青年 王嘯平の自伝的長編小説『南洋悲歌』、『客自南洋来』、『和平歲月』を読む」(日本中国当代文学研究会、2021年) および論文「祖国という異郷に生きる マラヤ華人王嘯平の自伝小説を読む」(『Journal of International Studies』No.7、2022年): 王嘯平の自伝小説から、その思想と人生を検討した。
2. 論文「南洋華僑とその家人 茹志鵬、王安憶から見た王嘯平」(中国モダニズム研究会編『夜の華: 中国モダニズム研究会論集』中国文庫、2021年): 中華人民共和国の著名作家であり王嘯平の妻、娘である茹志鵬、王安憶のテキストを視野に入れながら、文学者王嘯平を多角的に照射した。
3. 口頭発表「王一家の百年 王嘯平、茹志鵬、王安憶から見た「社会主義」」(日本現代中国学会 第71回全国学術大会 共通論題 2021年10月23日) および論文「王一家の百年 王嘯平、茹志鵬、王安憶から見た社会主義中国」(『現代中国』96号、2022年): 20世紀100年の中国文学の視点から、王嘯平、茹志鵬、王安憶という文芸家族のテキストを検討することで、中華圏100年の文学を考察した。
4. 口頭発表「ことばを獲得すること 中国「新時期」文学と勃興期の「馬華文学」」(中国モダニズム研究会、2023年): 20世紀初頭の「馬華文学」黎明期の文学状況と、文化大革命直後の中国の文学状況とを、あらたな言葉の獲得、という視点から考察した。
5. 論文(王晴訳)「“新中国”的母女 文化大革命后的茹志鵬小説」(王晴編『日本漢学中的上海文学研究』上海遠東出版社 2021年): 王嘯平を含む家族の視点から見た茹志鵬文学の検討。
6. 翻訳「さらば友よ」『黒い雪玉 日本との戦争を描く中国語圏作品集』(共訳、中国書店、2022年): 王嘯平文学初の邦訳。王の娘で作家の王安憶の散文とともに、訳出した。

(2) 現地訪問、研究交流：

初年度より数年にわたりコロナ禍で現地へ渡航できなかつたため、現地で資料を集めたり、中国語文学の現状を肌感覚で理解することができず、20世紀初頭の馬華文学研究自体はやや難航した。しかし最終年度には渡航を果たし、マレーシアのSouthern University College内にある馬華文学館を訪問し、館長で作家でもある許通元氏と現在にまでつながる知遇を得たほか、現地でしか手に入らない資料を収集することができた。また許氏との交流を通して、馬華文学においては数少ない女性作家に対する興味を喚起されるなど成果を得た。

(3) 中国語圏文学における中華人民共和国文学の再検討：

世界的に提唱されている中国語圏文学という概念は、必ずしも中華人民共和国の主流文学を含んでいるわけではなく、ともすれば中国の文学の求心力に対する対抗言説としての機能をもつ。では逆に、そのような状況下において、言論統制が厳しさを増す現代中国の文学は、どのように考えるべきなのか。

本研究を進めるにあたり、国民国家文学の枠組みを超えた中国語圏文学というプラットフォームへの理解を深めたことは、逆説的に研究者が定点観測としてもうひとつの研究課題である中国の同時代文学への考察を喚起し、より豊かなものにする事になった。その成果として、以下のものが挙げられる。

1. 論文「知識青年がことばを綴ること ふたつの「孩子王」を再考する」(『日本中国当代文学研究会会報』37号、2023年)
2. 自伝解題集『中国20世紀自伝回想録解題集『野草』増刊号』(共著、劉賓雁『劉賓雁自伝』茹志鵬『她從那條路上來』、從維熙『走向混沌三部曲』担当、2022年)
3. 文学事典『中国語現代文学案内 中国、台湾、香港ほか』(栗山千香子、上原かおり編、ひつじ書房、2024年、王安憶、鉄凝の項目担当)
4. 「書評濱田麻矢『少女中国 書かれた女学生と書く女学生の百年』」(『図書新聞』2022年4月16日)
5. 「手練れがキャノンを読み解く 書評 許子東『重讀二十世紀中國小説』」(『中国文芸研究会会報』507号、2024年1月)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 松村 志乃	4. 巻 96
2. 論文標題 王一家の百年 王嘯平、茹志鶯、王安憶から見た社会主義中国	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代中国』	6. 最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松村 志乃	4. 巻 7
2. 論文標題 祖国という異郷に生きる マラヤ華人王嘯平の自伝小説を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『Journal of International Studies』	6. 最初と最後の頁 131-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松村志乃	4. 巻 37
2. 論文標題 「知識青年がことばを綴ること ふたつの「孩子王」を再考する」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本中国当代文学研究会会報』	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松村 志乃
2. 発表標題 「ことばを獲得すること 中国「新時期」文学と勃興期の「馬華文学」
3. 学会等名 中国モダニズム研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松村志乃
2. 発表標題 「人民中国に生きたマラヤ文学青年 - - 王嘯平の自伝的長編小説『南洋悲歌』、『客自南洋来』、『和平歲月』を読む」
3. 学会等名 日本中国当代文学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松村志乃
2. 発表標題 「王一家の百年 王嘯平、茹志鵠、王安憶から見た『社会主義』中国」
3. 学会等名 日本中国学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 [編] 加藤三由紀編、[共訳] 加藤三由紀、倉持リツコ、斎藤晴彦、佐藤普美子、塩旗伸一郎、下出鉄男、下出宣子、天神裕子、徳間佳信、西端彩、福島俊子、布施直子、松村志乃	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中国文庫	5. 総ページ数 388
3. 書名 『黒い雪玉 日本との戦争を描く中国語圏作品集』	

1. 著者名 [編] 中国文芸研究会、[著] 松村志乃他45名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中国文芸研究会	5. 総ページ数 -
3. 書名 『中国20世紀自伝回想録解題集』	

1. 著者名 [編]王晴、[著]松村志乃他17名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上海遼東出版社	5. 総ページ数 406
3. 書名 『日本漢学中的上海文学研究』 「“新中国”の母女 文化大革命後の茹志鵬小説」	

1. 著者名 神谷まり子,大東和重,齊藤大紀,福長悠,中野徹,中村みどり,田中雄大,城山拓也,杉村安幾子,中野知洋,池田智恵,奥野行伸,大野陽介,松村志乃,高橋俊	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中国文庫	5. 総ページ数 450
3. 書名 『夜の華 中国モダニズム研究会論集』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------